

『妙法蓮華經玄贊』の一考察

——声聞成仏と一乗について——

清水 博 昌

法華經の中國における注釈書中で法相宗の立場から注釈した特色あるものとして『妙法蓮華經玄贊』（以下玄贊）がある。今法華經の重要教義である聲聞成仏（授記）と一乗について玄贊の所説を管見の範圍でみていく。玄贊は、一に叙經起之意、二に明經之宗旨、三、解經品得名、四に顯經品廢立、五に彰品次第、六に釈本文の六門を以て分別しているが、その中聲聞成仏について説かれる所は、初めの一に叙經起之意の五義の中、破疑執の「執を破す」中、聲聞に一決定種姓。二退已還發大菩提心（退き已りて還て大菩提心を発す）の二種を説き、初めは定姓、後は不定姓の二種であると示し、更に『法華經』等の四種聲聞（決定・増上慢・退菩提心・応化）大正二六・九・上）を引用して、一、決定種姓にして趣寂と名づく。二、増上慢、此れ凡夫にして四禪を得るを阿羅漢と謂う。三、退已還發大菩提心にして亦不定種姓と名づく。四、応化、応化は真に非ずしとし、その中「退已還發大菩提

心」を説く中

且法華會得記。聲聞名退菩提心。舍弗弗等皆是此類。故經自云告舍利弗。我昔教汝志願仏道。汝今悉忘。而便自謂已得滅度。

玄贊一本（大正三四・六五二・下）

として法華の會に授記される聲聞は退菩提心の者でその代表が舍利弗とされている。そして不定姓が皆な退菩提心の者である訳ではないが、「昔日未だ大を求めず、今は但小果に従つて大に趣く不定姓有るが故なり」として今日小果に従つて、大に趣くのは不定種姓であるから退菩提心は不定種姓であるとしている。また「応化」を説いて

應化非真。攝大乘説。諸大菩薩及仏等化示為聲聞。引実聲聞向大乘故。富楼那等即其類也。（同前）

とし、応化。真ではなく、攝大乘論（無性攝論十、大正三一・四四七・中）には諸の大菩薩及び仏等化示して聲聞と為るのは、実に聲聞を引き大乗に向かわしめるのであると説かれ

『妙法蓮經玄贊』の一考察（清水）

るから、法華の会座にいる富樓那等はそれにあたるとし、『法華論』に「二種聲聞如来授記。謂応化者。退已還發菩提心者。」（大正二六・九・下）とあるに従って、法華經は退菩提心と応化の者（富樓那等）の爲のみに授記するとしている。

そこで四種聲聞の内の余の二聲聞（趣寂と増上慢）には何故授記されないかという点、

其趣寂者及増上慢。仏不与記根未熟故。菩薩与記。雖復總言汝行菩薩道当作仏。論言与記令発心故。（同前）

として趣寂と増上慢は根未熟なるがゆえに仏の授記はないが菩薩（常不輕菩薩）が授記する、しかしその意味は菩提心を発させる為で、初めから大乘の姓がない趣寂の者は根の熟することはないので菩薩の願心を以て方便して之を化して信意を生じさせるのであるとしている。

二聲聞のみに授記するとは法華論に依るのであるが玄贊によれば応化の者に授記するのは富樓那等が法華の会座にあるからそのように説くのであり「法華の一会と正しく唯退菩提心の爲のみに説き、兼て応化の爲にする」（大正三四・六五三・中）としている。従って法華經の聲聞成仏について玄贊は四種聲聞中退菩提心の聲聞即ち舍利弗等を成仏させることがその主目的であり、兼て亦応化の爲としているのである。

ここで玄贊は聲聞授記と一乗の關係を撰大乘論（大正三一・五一・中）の説く「一乘義によって次のように示す。

撰論十義解一乘云。為引撰一類及任持所余由不定種姓諸仏説一乘。所引一類即退菩提心聲聞。及任持所余漸悟菩薩退菩提心聲聞執著小果自謂究竟故。舍利弗言我悉除邪見於空法得証。爾時心自謂得至於滅度。迦葉亦言仏令我等出於三界得涅槃証。於菩薩法不生一念好樂之心。此皆昔時執著小意

（大正三四・六五三・中）

玄贊が二聲聞のみに授記するというのは撰論に「一類を引撰し及び所余を任持せんが爲に、不定の種姓に由りて諸仏一乘を説き給う」という事と同じで、一類とは不定種姓の諸聲聞（法華論は退菩提心）で、法華經の舍利弗（譬喻品所説）・迦葉（信解品所説）は昔時小乘に執着したのであるから彼らが退菩提心にあたる。そして諸仏が一乘を説かれると意趣は、「二乗の作意とは二果に執して極と為すが故に。此の執を斷ぜんが爲」（同前・六五三・中）であり、正に法華經はこの意味において一乗が説かれるのである。即ち玄贊は撰大乘論の一乗の解釈を以て法華經の一乗を解釈している。以上のことは、玄贊四本に一乗を五門に分別する中、「説意」を明かす中に撰大乘論の一乗十義が引用されて法華論によってその結論が説かれている。即ち「但二人に与えて記別す、一に不定性、二に応化者なり。不定性の爲には即ち第一第二第八の少分にて、応化者の爲には即ち第九及び余の少分にて一乗を説くなり。全く其の無と定との性とを撥ねるには非ず、

故に此の一乗は是れ密意説なり」(同前・七一六・中)としてゐる。「第一とは一類の不定種姓の聲聞独覺を引撰せんが爲に一乗を説く」という事で、法華論には不定種姓の聲聞を退已還發大菩提心とされ、舍利弗を退已還發と名づけてこれに一乗が説かれる。「第九とは化するが故に一乗を説く」即ち所化の聲聞を調伏せんが爲にである。このことから法華經は不定種姓と応化の爲に一乗が説かれたとされるのである。そして一乗が説かれるということは決して無姓と定姓との性を解消させる爲に説かれたのではないとし、これは仏の密意説であるとしている。

ところで、法華經の説く一乗を玄賛は聲聞成仏の理論的根拠と考えていたかという事が問題であろう。玄賛の法華經一乗の解釈は撰大乘論の十義によっているが、撰論の十義は「何の意趣を以て仏一乗を説く」(論本巻下、大正三一・一五一・中)という事で、仏が一乗を説くに当たって、その説く意味を示したものであり、一乗そのものを究明したものではないという事である、即ち玄賛がこの撰論の一乗説によって解釈する以上玄賛の一乗義は聲聞成仏の理論的根拠ではないといえるだろう。玄賛における聲聞成仏の理論的根拠は仏性にあるのであり、仏性の有無を問題とする五姓各別説によっているのである。即ち玄賛によれば、一乗は「二乗の中不定種姓に差別有るが故に、此の聲聞身に具に聲聞及び仏種姓を有す。

此の姓有るに由るが故に一乗を説く」玄賛四本(第六姓不同の項、大正三四・七一六・上)とあるように、五姓各別に立つて不定種姓の仏種姓を有する者を引撰する爲に法華經は説かれたという意味であり、一乗は仏性の有ることを示すものという意味と解釈していると考えられる。

次の所説はそのことを物語っていると思われる。一乗義の五門分別の中、第四彰差別に

第四彰差別者。此説一乗。与勝鬘涅槃經所説一乗差別相。(中略)此説一乗爲実二乗爲權。彼説一乗爲權四乗爲実

(大正三四・七一六・下)

即ち一乗は実或いは權という二様の説きかたがなされている。以上管見の範囲内において、玄賛の一乗の解釈は撰大乘論の一乗義によって解釈され、聲聞成仏との関係においては、その理論的根拠を仏性におき法華經は仏性を有する不定種姓の聲聞の成仏を説くもので一乗はその仏性を有する事を示すという意味で説かれ、一乗が聲聞成仏の理論的根拠とは解釈されていないと考えられる。従って玄賛は法華經の一乗の解明よりも仏性説に基づく五姓各別を説く事に主眼があったと思われる。

△キーワード▽ 法華玄賛、声聞成仏、一乗

(立正大学大学院修了)